

「腹の中のネズミ」

高橋桐矢

猫が、小さなネズミを追いつめました。

絶体絶命のネズミは、目をいっぱいに見開き、ぶるぶるとふるえています。

「猫さん、どうかお助けください」

猫は、目を細めました。それほど腹がへっているわけではありません。

ネズミは祈るように手を合わせました。

「助けていただけたら……」

「助けたら？」

白いひげの生えた鼻をひくつかせ、ネズミはふるえながら微笑みました。

「あなたの友達になります」

ネズミの言葉を聞くなり猫は飛びかかりました。

ごくりとまるのみして、ネズミは腹の中におさまりました。

「ふう……」

腹がふくれていっぱいになりました。猫は一つ、げっぷをしました。

猫は友達なんて欲しくありませんでした。

「わたしはたいくつしていたのだ。面白い話をしたら、助けてやってもよかったのに」
すると、まるまるとふくらんだお腹から、小さな声が聞こえてきました。

「本当ですか？ 友達が欲しそうな顔をしていましたよ」

ネズミの声でした。猫はびっくりして、自分のお腹を見つめました。柔らかい毛の生えたお腹は、猫が息をするたびに、ゆっくりと動きます。

いくらまるのみしたからって、お腹の中でしゃべったりするでしょうか。空耳に違いありません。

猫は体を丸くして横になると、すぐ寝てしまいました。

つぎの朝、めざめた猫は、大きくのびをしました。

「おはようございます」

さわやかなあいさつの声に、猫は、あたりを見回しました。

だれもいません。おそるおそる、自分のお腹に目を向けました。一日たったのにまだ、
お腹が丸い気がします。

「お前はネズミか」

「はい。ネズミです」

やっぱり、ネズミは猫の腹の中にいました。

かまずにまるのみしたせいでしょうか。猫はしかたなく、ネズミをお腹に入れたまま、いつもの散歩にでかけました。

「いいお天気ですね」

ネズミは能天気に喜んでいます。

「苦しくないのか」

「いいえ、全然。歩かなくていいので楽チンです」

猫は、フンと鼻を鳴らしました。歩きながらひとりごとをつぶやきました。

「耳がかゆい」

「左耳ですか？ 右耳ですか？」

「すかさずネズミがたずねます。」

「左だ」

「左耳がかゆいときは、いい知らせがあるって言いますよ」

どうとうことのないつぶやきでも、誰かがこたえてくれると、ちゃんと会話になるのだと、はじめて知りました。

それから猫は、お腹の中のネズミと時々話をするようになりました。

猫がひだまりでぬくぬくとねそべっていると、ネズミが腹から呼びかけてきます。

「猫さん、お腹はいっぱいですか」

猫は、片目をあけて、「ああ」と答えました。

さつきモグラをつかまえて食べたところでした。ネズミはしみじみ言いました。

「モグラもネズミも猫さんの食べものなんですよねえ。友達になんてなれませんか」

「なんだ、そこにはモグラもいるのか」

「いるっちゃ、いますけどね、猫さんとお話はできないと思いますよ」

ネズミの言うとおり、猫はこれまでいろんな生きものを食べてきましたが、腹の中で話をするものなんて、いませんでした。

猫はからだを起こしました。腹にはネズミが入っているので、丸くふくらんでいます。

「お前はなぜ、友達になるなどと言ったのだ」

ずっと聞いてみたかったです。

お腹の中で、ネズミはもぞもぞ動きました。

「そうですね。食べられたたくなくて必死だったんです」

「そんなことだろうと思った。わたしが、友達が欲しそうな顔をしていたなんて、でまかせだろう。あのときお前とはじめて会ったのだから」

猫は、お腹に目を向けました。前より大きくなっているような気がします。まるのみした小さなネズミが、お腹の中でだんだん大きくなっているのでしょうか。

「そうですね。本当は友達が欲しかったのは、ぼくのほうだったのかもしれない」
ネズミの答えを聞いて、猫は満足しました。

「さみしいやつだな」

「でも今はさみしくありません」

ネズミの声ははずんでいました。

「猫さんがいるから」

猫はだまっていました。

息をすると、丸くふくらんだお腹が、ゆっくりと動きます。

猫は、ネズミをまるのみするまで、誰ひとり友達がいませんでした。友達がいないのに、さみしいとも思わなかったのはどうしてでしょうか。

大きな生きものはすべて敵。小さな生きものは食料。たまさかに同族に行き会うことがあっても、言葉を交わすこともありませんでした。

誰とも話さず、一人で食事をし、一人で散歩し、一人で寝て平気だったのが、遠い昔のようです。

今はいつも、お腹の中にネズミがいます。

猫は立ち上がって、体を伸ばしました。

「散歩に行くか」

猫はネズミが苦しくないようにゆっくりと歩きました。確かに前よりお腹が大きくなっています。このごろは、ネズミのぶんまでお腹が減るので、二人分、食べています。

それからしばらくたったある日、猫は、落ち着きなく歩き回っていました。お腹が痛くてじっとしてられないのです。

猫のお腹は、もうばんばんに張っていました。

お腹の中でネズミが大きくなりすぎたのでしょうか。

しゃがみこんだとたん、お腹にぎゅつと力が入りました。あつと思ったときはもう、猫は、何かを産み落としていました。

おそるおそる、自分の腹の中から産まれたものに目を向けます。

それは、黒くてぬれていて、もぞもぞと動いていました。包まれた膜を破ってやると、突然勢いよく「にゃあ」と鳴きました。

「ネズミ……。お前は猫となって産まれてきたのか」

猫は、思わずつぶやきました。

小さな猫の赤んぼうは、目も開かず、しっぽも短く、手足もちいさく、まるで出来そこないのネズミのようです。けれど、よくよく見ればやはり、真正正銘の猫なのでした。

さっきまでばんばんに張っていた猫のお腹は、今はもうしぼんでいます。

しぼんだ腹に「ネズミ？」と呼んでみましたが、何も答えません。

猫は、もぞもぞと動く小さな赤んぼうに目を向けました。見ていると、何ともいえぬ愛しい気持ちだが、ぐっとこみあげてきました。

猫は赤んぼうをなめてやりました。

「わたしがいるから、さみしくないぞ」

そのとたん、赤んぼうは、声をはりあげて泣きだしました。

終わり